

曲目解説

歌劇「ルスランとリュドミラ」は1842年4月に作曲されている。ロシア以外ではほとんど上演されていないが、序曲だけは多くの演奏会で採り上げられている。この歌劇は、これより6年前にグリンカが発表して大成功を博した「皇帝に捧げし命」と並んで、ロシアの物語、ロシアの音楽による優れた歌劇であるために、ムソルグスキーやリムスキー・コルサコフらの「五人組」をはじめとするロシア国民楽派に大きな影響を与えた。曲はニ長調、2分の2拍子のプレストで、ソナタ形式で書かれている。終結部に六全音音階が用いられているのが、これはドヴェュッシーに先立つこと半世紀であり、注目されている。

ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番は、彼が書いた4曲のピアノ協奏曲で最高傑作といわれるばかりでなく、チャイコフスキーの第1番と並んで、ロシア人が書いたピアノ協奏曲としてもっとも演奏回数の多い曲であろう。とくに映画音楽として使用されて以来、その甘美な旋律は世界中で知られるようになった。

この曲の成立事情には、いささか興味深いエピソードが残されている。ラフマニノフは、音楽院を1892年に卒業して以来、天才的な作曲家兼ピアニストとして活躍をはじめめるが、97年に初演された交響曲第1番が、さんざんな不評を浴び、強度の神経衰弱に陥ってしまった。ピアニストとしての活動は、なんら支障がなかったのであるが、作曲がまったくできなくなってしまったのである。そして、この症状は99年にロンドンでピアニストとして大成功し、新しいピアノ協奏曲の作曲を依頼されてから、一層ひどいものになってしまった。このとき彼を救ったのが精神科医のダール博士だった。博士は1900年1月から4月までの期間、徹底した暗示療法を施し、それによってラフマニノフのノイローゼは完治したのである。早速ラフマニノフは新しいピアノ協奏曲の作曲にとりかかり、翌年ついに完成した。

ベートーヴェンは、その第1から第5までの5つの交響曲を抽象的な又は心理的な絶対音楽としたが、第6では眼を内から外に向けて自然に対する喜びと満足とを表した。

ベートーヴェンは、メンデルスゾーンのように乗馬も水泳も出来なかったが、田園は大好きで、ウィーンにいる時は毎日日課として必ず近郊を歩き廻り、夏には決って田舎に生活して大自然に親しんだ。特に、耳が悪くなってからは、人の世よりも自然を愛し、そこに慰めの友を見出し、そこに靈感を求め、そこで神と語った。

ベートーヴェンは、この曲を「田園交響曲」と度々呼んでいるし、初版の楽譜にもそう明記させている。その上、はっきり「田園生活への思い出」ともいっている。しかも、それだけではなく、その個々の楽章には、ベートーヴェンの作品としては、珍しくそれぞれの標題が附いているし、曲中には随分写実的な自然描写がある。すなわち、これは明かに田園曲、それも描写的な標題音楽である。

しかし、それと同時にベートーヴェンは、これを「絵画よりもむしろ感じの表出」として、純音楽にしようとした。それがためには標題のような「説明などがなくても、人は音描写よりもむしろ感じである全体を認識するだろう。」と信じたのだった。ここには、小川も、小鳥も、嵐も、雷も、農民のダンスも、牧歌もあるが、そういうものは模倣のために模倣をしたのではなくて、感情を表出する手段とし、或は、対象に対する感じを表すものに他ならないのである。それ故にこそベートーヴェンは、「誰でも田園生活の考えさえあれば、多くの説明がなくとも、作者の意とするところを自ら考えることが出来る」といって、標題を詳しくすることを避けたのである。つまり、これは、「性格的な交響曲」で、創作者の自然感や世界観を表す純音楽なのである。